

なののはな通信

No.33 2023.3



「平和の武器は学び」命を護る医療者を決意

2020年1月に発症報告された「新型コロナウイルス感染症」の世界的感染拡大、また日本全国への感染拡大は、ワクチンの普及、治療薬の開発など状況の変化を見ながらもいまだ収束が見えない状況が続いています。

この3年間、本校でも感染対策の徹底が求められる中で、授業や臨地実習の在り方も大きな変化を余儀なくされましたが、情勢の分析を行いながら、学びを止めずに対面・オンラインによる学習を作り上げてきました。コロナ禍の中でも、講師の皆様や臨床からの大きなご協力をいただき、東葛看護専門学校の教育理念をもとに学生の成長を応援してきました。

「コロナ禍でも実習に行くことができ、患者さんの思いを知ることができた」そして「オンラインでの授業も増え、例年どおり授業が行えないこともあったが新しいことをたくさん学ぶことができ仲間と日々学びあうことの大切さと楽しさを知った」「人生で初めて勉強が楽しいと思える1年だった」など、学生は、学校での学びと臨地実習で、必死に生き抜こうとする人間の力強さ、人間の回復力のすばらしさを実感し、社会や平和と

人権そして医療者の役割にもしっかり目を向け、人としての成長も遂げています。

コロナ禍でアルバイトの減収や世帯収入の減少など学生の経済状態にも大きく影響を及ぼす中、東京民医連退職者の会から学生全員に義援金（クオカード）が送られました。今年度東葛学食も再開されるなど、地域の方々のあたたかい励ましやたくさんのご支援をいただきました。心から感謝申し上げます。

この「なののはな通信」には今年度の各学年の学びの状況、縮小ながら縦割りを再開して取り組んだ「東葛祭」様子など生き生きと学ぶ学生の姿が描かれています。

今もそして今後しばらくは、リモート授業や臨地実習の中止や縮小、学内でも学年を超えての交流などが困難な状況に陥ることも予想されますが、コロナ禍の後につくるべき社会に思いを馳せながら、様々な困難を励ましあって乗り越えていきたいと思います。



校長 窪倉 みさ江

学生と 共に歩んだ一年

1年生

28期生

担任

廣澤絵美瑠

生田知歩

高田澄子



28回ナーシングセレモニー

2022年4月、私たち28期生は新しい環境に不安を覚えながらも看護師になりたいという強い思いを抱き、東葛看護専門学校に入学しました。入学当初は、これから過ごす3年間のようになるのか、クラスメイトと打ち解けられるか、全員が緊張した様子で学校生活が始まりました。

4月、地域の人々の生き方から仲間とともに主体的に学ぶことを目的に地域交流研修を行いました。前頭側頭型認知症を患う妻を17年間介護している80歳代後半のAさんからお話を伺いました。Aさんは「現役

の時に奥さんにお世話になっていた」「恩返しの介護」とおっしゃっていて、医療者から見ると在宅介護が厳しいとされている患者さんが、在宅で生活している事実を知りました。Aさんは奥さんと自宅で生活をするために、介護の資格を取って学び続けています。意思疎通が難しい状態になっても、奥さんの大好きなピアノを練習し、夫婦の時間を自宅で大切にすごしています。看護の基礎となる「ありのままに捉える大切さ」

を学ぶことができました。

5月には移動・運動の授業で街中を車椅子に乗り、体験してきました。実際に移動してみると、ブロックなどで幅が狭く通れないところや整備されていない道が多くあり、自由に移動する権利が十分に叶えられてい



患者さんの生き方に学び、願いを応援できる看護師目指していきます



生命活動（消化器グループ）
腸内細菌と免疫の関係をわかりやすく説明

い現状を知ることが出来ました。

6月、観察・計測の授業の一環で、運動負荷実験を行いました。運動をすると、呼吸回数・脈拍数・血圧・体温は変化します。これは身体の内部環境を一定に保ち維持する恒常性の働きであると学びました。

9月、基礎Ⅰ実習であるペアは、80歳代後半女性の患者、Cさんを受け持ちました。Cさんは重度の認知症を患っていました。しかし、70年間八百屋で必死になって働いていたことをたくさん話してくれ、このことはCさんの人生そのものであると感じました。実習の最終日にCさんが教えてくれた野菜の調理法や豆知識など好きな野菜や八百屋で働いていた事をさらに思い出してもらえないかと考え、ノートを作成



生命活動（骨・筋グループ）骨の形成と骨吸収には
ホルモンやビタミンDが関わっている

し、渡すことができました。患者さんの言葉や行動をありのままに捉え、その人の人生観を尊重し、患者さんがどのように生きてきたかを知ることによって、患者さんの頑張りを応援できると学びました。

11月、ナーシングセミナーを行いました。決意文を作成する中で入学してから8か月を振り返り、わかりやすく学びを伝えるにはどうしたらいいのか悩みました。当日は緊張感あふれる中、決意表明と合唱を行いました。担当した学生は入学前、患者の安全のために抑制帯をつけることは当然だと思っていた。この実習で抑制帯をどうすれば外すことができるのか、短い時間でも外したい、と考えるようになったことを実習後のゼミや授業でも共有し、クラス全員での学びになりました。

12月、呼吸器系、循環器系、人間誕生など、8つのグループに分かれて生命活動のゼミを行いました。今までの学習を土台に生命の誕生と進化の過程を踏まえて調べ、いつでもどこでも誰にでも説明できる力をつけることを目標にゼミを行いました。各系の系統発生、個体発生を学び合うことで、ビッグバンにより始まる地球誕生からヒトの誕生、成長、発達まで全ては繋がっており、長い年月をかけて今の私たちがいるのだと知りました。生命の歴史から見ると、生物は環境の変化に応じ身体を進化さ



演習風景 看護技術（洗髪）
気持ちが良いと思ってもらえるように

せてきました。現在、森林伐採など我々の手によって地球温暖化が驚異的なスピードで進んでいます。自らの行動で地球を壊していくことは決してあってはならないと学びました。日々、生きていくために働き続けている細胞への感謝と、人間の生命活動は各器官と相互に関係しており、8つの系は全て繋がっていることを学びました。また、東葛祭での学びの発表では生命活動の学びを全てのグループで発表をしました。学年を越えての発表となり、学びを楽しく共有できました。

入学してから10か月、座学だけでなく、グループワークやゼミ、実習を通して様々な学びを得ました。患者さんの言葉や行動をありのままに捉え、その人の人生観を尊重し、患者さんがどのように生きてきたかを知ることによって、願いや要求を応援できる看護師を28期生41人で目指していきます。

学生と 2年生 共に歩んだ一年

27期生

担任

富田智恵
臼倉智美
飯島時子
瀧本美陽



稲刈り（生命活動）皆で頑張りました

2年生になってすぐ生命活動が始まりました。4～7月にかけてそれぞれの系で進化の過程をふまえて学び、ゼミで発表しました。

人間誕生を調べる中で今の魚と人間は違うけれど自分が持っている肺や腎臓などが魚から出来たものと学びました。それが分かるように胎芽には魚のようなエラがあり、エラ呼吸していた。人間の誕生は、まるで40億年の生命の進化を母体の中で早送りしているかのようであった。生命が生まれるということは心身の生理的な変化と科学

的根拠に基づいて誕生している。1人1人がこの過程を通った大切な個人である。そのため、命の尊厳は平等に守られるべきである。長い歴史の中で作られた命であることから障害や性別の違い、人種の違いなど、ちょっとした違いはあるが偏見を持つことなく命の重さは変わらないのである、ということを学ぶことができました。

成人Ⅰ実習で受け持たせていただいた患者さんは外国籍のD氏を受け持ちました。

体調確認を行う際、最初は口頭で行っていたが言葉が正確に

伝わっていないのではないかと考え、きちんと症状を伝えてもらえるよう、正確に観察ができるように必要な単語を母国語に変換しそれを台紙に張り付けたものを作成し、訴えが理解できるようになりました。また、D氏にはアルコール依存症があり、受け持つ前は禁酒できないのは自分の意思が弱いからと思っていました。しかし、禁酒できないのは患者さんの意志の弱さで起きることではなく脳機能の障害なのだと分かりました。また、D氏がアルコールに頼る理由には、ロシアとウクライナの戦争が起こったことが関係していま



田植え（生命活動）田んぼは以外と暖かい



収穫祭 メニューはハンバーグ定食（美味しく頂きました）

した。このことから、患者さんの背景を知るために社会情勢だけでなく、世界情勢にも目を向けていきたいと思います。

今回の実習で知識がないと短絡的に意思が弱いから病気になったのだ、と考えてしまうが、病態を理解することによって患者さんの見方や理解がより深まることが分かりました。

在宅実習では左足を骨折、手術後、リハビリを終え退院し、自宅で生活している方を訪問させていただいた。現在は転倒リスクがあるため、自宅内では4点杖を使用しており、屈むことが出来ないためヘルパーが週に3回掃除を行っていました。しかし、掃除が行き届いておらず、

害虫が湧くほど環境も悪くなっており、床に物が散乱しているため転倒する可能性がありました。その方は「自分の足で歩いて酒屋でお酒を買いたい」という願いがあり、散歩を勧めましたが転倒を気にされ外出されませんでした。そのため私達は自宅の環境を整える実践を行いました。受け持ち終了後に再び環境が悪化しないよう、訪問看護ステーションのスタッフに、ケアプランの見直しでヘルパーの介入時間を増やしたり、他のサービスを受けられるよう提案

しました。訪問を通して、健康というのは決して病気になっていない、障がいがないということだけでなく、環境は健康と密接につながっていることを学ぶことが出来ました。

老年看護学実習

慢性腎臓病で認知症も患っている80歳代男性のB氏を受け持ちました。B氏は散歩が好きで、「歩こう会」を立ち上げ、そこでは旗を持ち、先頭を歩いているような方でした。2時間の経管栄養中に車椅子ベルトを装着し、PEG

を抜いてしまう危険性から抑制着を着ていました。歩くことが生きがだったB氏が、自分がやりたいと思う時に思うようにいかず制限されてしまうことは、とても辛いことだと感じたのと同時に、今まで当たり前にできていたことが、病気を発症したことでできなくなってしまった状況が易怒性に繋がっているのではないかと感じました。それは拘束により自由に動けないことに対する苛立ちであり、人として当たり前のことなのではないかと考えました。B氏の話聞き、B氏が車椅子から立ち上がった際には、止めることなく学生が付き添ったことは、B氏の人権を護る看護応援に繋がっていたのだと学びました。身体拘束は、B氏の自由に動きたいという願いや可能性を奪っている事だと改めて考えさせられ、どのようにすれば身体拘束を行わなくて済むかを考えることが大切だと学ぶことができました。

これらの学びをさらに発展させて、自分たちの実践に生かしていきたいと思います。



演習風景（採血）看護師役も患者役も超緊張の瞬間

学生と 3年生 共に歩んだ一年

26期生

担任

大井 涼

戸澤亜矢

中川千和子



サトウキビ畑の島が戦場に

2022年9月、沖縄に研修旅行に行きました。新型コロナウイルスの感染拡大の影響から、実際に現地に出向いての研修旅行は3年振りでした。2022年7月より、感染は再び拡大し第7波に入りました。沖縄でも感染者数は増加し、全国でも最大レベルの感染拡大となりました。現地での研修旅行は困難となることも考えられました。研修旅行をどのように進めていくのか、安全を考えた研修旅行委員会を中心にぎりぎりまで追求し、沖縄で学ぶことができました。

研修旅行1日目から2日目にかけて南部から中部、3日目には北部、伊江島を回りました。4日目は、学生それぞれが計画を立て、美しい海をはじめ、沖縄の文化を感じる最終日となりました。77年前、唯一の地上戦があったその場所から、そして、戦争を経験された方から、平和ガイドさんから、学生たちは改めて命の大切さを学び、戦

争のない平和な社会を創っていくことを決意していきました。

No War, No Base ～戦争のない世界 基地のない日本へ

1日目に行った糸数アブチラガマでは、明かりを消すと、どこを見渡しても真っ暗で、目を閉じているような感覚だった。地面はでこぼこし、水浸しで転びやすく、天井は低くしゃがまないと頭をぶつけてしまう環境だった。当時あったとされる治療室には看板がつけられていた。とても適した場所とは思えなかった。ガマは足の踏み場もないほど人がいて、何日間もあの場所にいたと想像するだけで恐ろしかった。本当にあの場所で人が生活し、麻酔なしでの手術が行われていたと思うと、現在の私たちでは考えられないことを強いられていたのだと思った。治

療が受けられるのは、軽症で治る見込みのある兵隊のみで、再び戦場に送り出されることを知った。77年前、人がリサイクルのように扱われ、命が命として扱われていなかった事実を知った。

2日目、普天間基地を見学。基地にはオスプレイが何台も並んでおり、滑走路が長く続いていた。オスプレイは上空3000mでエンジンを切る訓練をしており、いつ墜落してもおかしくない状況と隣り合わせであることを知った。飛行するときの爆音を実際に聞き、こんな騒音の



沖縄の海を背景に



沖縄戦の歴史は驚くことばかり

中で毎日生活していくなど、考えられないと思った。また、基地からは汚染水が地下水に入っていることを知った。汚染水は身体に影響を及ぼす可能性がある。しかし、日米地位協定により、汚染水の調査もできない。沖縄県民の健康に生きる権利が奪われていると感じた。グラスボートでは美しい海や魚、サンゴをみることができた。しかし、辺野古基地の埋め立てによりその場所は壊されていた。沖縄の人たちは辺野古基地建設に反対し、声を上げているのに、なぜ国は変わらないのだろうかと思っていたけど、それは自分が沖縄の問題を他人事に捉えていたからと気づいた。

3日目は、伊江島に行き、謝花悦子さんからお話を聞いた。謝花さんは何度も戦争は人災と話していた。戦争は失うものしかない。命が一番ではなくなり、人権もなくなると思った。そして、その言葉は、戦争を経験したからこそ誰よりもいのちの尊さを知っていると感じ、言葉の重みを感じた。また「平和の武器は学習」学ぶことから始まらなければならないと何度もおっしゃっていた。研修旅行に来なければ、沖縄に起きている問題を知らないまま生きていたと思



船で観光

う。日本の問題でありながら知らなかった自分が恥ずかしく思えた。

4日間をとおして

沖縄に行き目にした問題は、私たちの問題であり、全員が知り考えなければならないことだと痛感した。そして、目を背けてはいけなかった。日本は終戦しているのだろうか。沖縄はもちろん、日本から基地がなくなり、命の心配がされなくなったときはじめて終戦といえるのではないだろうか。幸せを望まない人はいない。戦争のない世界や武器のない世界にするためには過去のことを知り学ぶことが必要であると学んだ。犠牲になられたたくさんの方たちから平和について考え続け、引き継いでいくことが私たちの役目だと思う。平和の中に看護があり、人々の命を護ることが私たちの役割だと感じる。今も闘い続けている沖縄の方の思いを知り、事実を知り、私たちは声を上げていこうと思う。

総合実習 ～基本的人権擁護の立場に立つ看護～

胸椎圧迫骨折で入院した80歳代男性Aさんは、幼少の頃戦争を体験された方だった。「苦しかった。思い出すと涙が出る」と話された。小学生の時、藁人形で竹やり練習をしていたことや、終戦後は食べることもできず、あらゆることをやったそう。中学生から林業につき、その後24年間バスの運転手をして生計をたててこられた。骨折に対し、コルセットでの治療が必要であったが、金銭的な問題からコルセットの作成を拒まれていた。また、リハビリで使用する靴を購入できず、サンダルでリハビリをする姿があった。入院費用を払えるか不安があり、家売ることも考えていた。医療費を払えなければ本来受けられ

る医療は受けられなくなり、命と健康が脅かされてしまうという問題意識から社会保障について研究をしていった。歴史を学ぶ中で、2001～2006年の小泉構造改革は、弱い部分を切り捨て、強い部分を強くし日本経済を再生するというものであった。弱くて負けるのは自己責任という弱肉強食の社会となり、弱いものは切り捨てられていった。それは、社会保障の縮小と破壊であった。5年間に社会保障費は1兆2000億円が抑制され、患者負担額は3割まで引き上げられた。さらに、自助を基本にするという、理念の根幹まで変えようとする動きが強まっていることを知った。一方、2022年度の防衛関係費は過去最大の5兆3687億円となっていることを知った。在日米軍駐留経費の日本負担額は2056億円と増額されていた。この事実には驚いたと同時に、本当にこのお金によって国民の命は護られているのか疑問に思った。戦争はたくさんの尊い命や生活が奪われる。今のままでは、憲法で保障されている私たちの権利が奪われようとしている。権利は他者により奪われることはあってはならない。朝日茂さんは「人間として生きる」ことを社会に訴え、人間の尊厳・人権が護られるために声を上げ、権利を獲得してきたことを知った。この社会には、知ろうとしなければ知ることができないことがあると学ぶ中で感じた。これから医療者になるものとして、常に事実から学び、患者さんの命、健康、権利が護られているかを考え続け、憲法に立ち戻り、患者さんの立場にたち応援できる看護師になりたい。



寄せ書き

「平和な社会を目指そう」

第28回 東葛祭

本校の文化行事は年度初めに動き始める。

2020年1月新型コロナ・パンデミックが、世界中の人々の生活を一変させ、感染制御できないまま、'21東京オリンピック開催。医療機関に大きく影響され、看護実習が保障できるのか、カリキュラム変更をくり返す混沌のなかで、成長する学生に励まされ3年ぶりに東葛祭を開催できた。

5月、「仲間とともに一致団結 進んでいく学び」～密回避で親密作戦～がテーマとなる。“7派終息せず8波襲来！”報道の9月、オミクロン株対応ワクチン接種開始。

年度前半の実習（履修）が過ぎ、学生・教員の緊張が少



しほどける感がある。

東葛祭の当日は縦割り企画である“お化け屋敷・VS 嵐・トイストーリーマニア・食事処の学生が動き出す。外部発注された・おにぎり・お稲荷・焼鳥・中華まん・ドーナツ・アイス。

食べ慣れた味なのに、いつもと違うおいしさがある。

直近まで模索した教員学習企画。「荒野に希望の灯をともし～医師・中村哲 現地活動35年の軌跡～」DVD映画。全員が講堂に集合し観ることができた。コロナ前には日常にあった学びを取り戻せたことに思いが込みあがる。アフガニスタン・パキスタンで35年、建設した用水路の水は干ばつの大地を恵み豊かな緑野に変え、65万人のいのちを支えているという。何者かの凶弾に倒れた中村医師が、命を賭して遺し



たものを私たちも引き継ぎたい。世界中の人に見てほしい映画。

学びの交流も豊かな発展を見せてくれた。8系の生命活動すべてをグループで伝えてくれた1年生。母はロシア人、父はウクライナ人の女性を受けもった成人1実習。肝不全で透析治療をした病態の厳しさを生活史から紐解いた2年生。心雑音と黄疸があり光線療法を受ける児へ、頻回授乳する母子からいのちのち育む強さを学んだ3年生。意見を一致させながら進む親密作戦で、授業や実習で出会わない学生の団結力をみせてくれた。飛び入り?!有志のハーモニーと歌唱力!!!で一気にテンションアップする。人間の可能性と希望を教えてくれた学生・教職員みんなに伝えたい「3年ぶりコロナ禍の東葛祭をありがとう」

実行委員の方々ありがとうございました。

(担当教育 戸澤・生田)



平和ゼミナール

原水爆禁止世界大会に参加して



原水爆禁止 2022 年世界大会は広島で行われました。今大会は「被爆者とともに、核兵器のない平和で公正な世界を一人類と未来のために」というテーマのもと 8/4～9 の日程で開かれ Web で 2 名参加しました。

2022 年 2 月にはロシアによるウクライナ侵攻が始まりました。まさにロシアは核で威嚇しながら進行していきました。ロシアやウクライナの平和活動家の方々の報告によると、ロシアでは侵攻が始まって 1 週間は反戦運動が多かったそうですが、ロシア軍に対する「信用を失墜する行為」を行った場合、最長で懲役 15 年を科す法案ができ、報道規制や言論の自由が迫害される事態となった。

ロシアの平和活動家は暴漢に襲われ入院する被害にあり、活動場所も厳しく監視されているそうです。さらに報道によると、ウクライナのヤヒドネ村では 3 月ロシア軍によって住民 350 人以上が学校の地下に電気も食料もない中 28 日間も監禁され死亡者も出た。ブチャではか月で 400 人以上が虐殺された。無抵抗の状態で処刑や拷問、レイプもあり路上に遺体が転がる姿は世界に衝撃を与えた。ロシア軍はウクライナのザポロジエ原発にも攻撃を加え一時電力の供給ができなくなったり、今はロシアに占拠されている状態である。ここはヨーロッパ最大規模の発電出力があり 6 基の原子炉があります。もし爆発したらチェルノブイリの 10 倍の影響がある

と言われており、ここを掌握することで市民生活に影響のある電力を止め戦意をそぐ狙いがある。現に今極寒のウクライナは電気を止められた生活を強いられている。このような情勢は報告や報道で知り、改めて戦争の中では市民の命が脅かされ、生活はまともにできず、人権が護られないことがわかりました。さらにロシアでも言論の自由が奪われ、独裁者が次々に都合のいい法律をつくり市民の生活も困窮していています。

このような情勢の中、6 月核兵器禁止条約の第 1 回締約国会議が開かれました。80 国以上の国と地域が参加しウイーン宣言とウイーン行動計画が採択されました。「核兵器は、平和と安全を守るところか、強制や威嚇、緊張の高まりにつながる政策の道具として使われている」と断罪し、「私たちは最後の国が条約に参加し、最期の核弾頭が解体、破壊され、地球上から核兵器が完全に廃絶されるまで、休むことはないだろう」と決意を表明した。

厚生労働省の資料によると、被爆者健康手帳を保有する被爆者の平均年齢は 84.53 歳、同被爆者数は 11 万 8953 人と高齢化が進んでいる。被爆 77 年の今年「生きているうちに核兵器をなくしてほしい」との訴えを受け止め、日本政府に核兵器全面禁止・廃絶、核兵器禁止条約に署名・批准させる運動を、平ゼミとして勉強しながら頑張っていきたいと思えます。教員 富田智恵

原水爆禁止世界大会に参加して初めて黒い雨訴訟のことを知りました。今現在も原爆の被爆者は苦しみ続けていました。放射能（黒い雨）を浴び数年後に癌や他の病気にかかり亡くなる人が多かった。年をとってから被爆者は放射能（黒い雨）の影響を受けているにもかかわらず 75 年間政府は被爆者たちに被爆者健康手帳を渡すことはなく、2020 年に広島は救済対象になった。

2022 年 4 月 1 日から新たに被爆者健康手帳を受け取るための要件が 2 つでていて一つは「黒い雨」に遭い、遭った場所・時間帯、降雨状況、生活状況などが 2021 年 7 月の広島「黒い雨」訴訟判決の原告と同じような事情にあったことが確認できること。二つ目は 11 種類の障害を伴う一定の疾病のいずれかにかかっていることが確認できること。新基準で黒い雨被害者の救済対象が拡大した。しかし、長崎は客観的な資料がないことから救済対象にならないと知り怒りが込み上がった。早急に救済をするべきであると考えます。

禁止条約締約国会議には、ドイツやオランダ、ベルギーなどの NATO 諸国、オーストリアなどがオブザーバー参加したのにもかかわらず日本は締約国会議に出席しませんでした。その後、スペインで開かれた NATO 首脳会議では、アメリカの核の傘へ依存するような発言をしていました。また、ロシアだけでなくアメリカや NATO も「核抑止力」の維持・強化をはかっていることなどを知り、被爆者の方々の核廃絶の願いに向けて今回学んだことを沢山の人たちに伝えていき、私たちが今できることは何かを考えていかなければいけないと思いました。

私たち平和ゼミナールは 3 年生が卒業してしまうと 1・2 年生合わせて 2 人で活動していかなければいけません。平和ゼミナールでは原水爆禁止世界大会への参加など平和について学んでいます。興味のある人、誰でも歓迎しています。是非お待ちしています。

2 年生 加瀬優大

25期自治会活動紹介

1月25日1限、学生在籍数127名、出席人数115人、欠席人数27人にて第25期学生自治会臨時総会を開催し方針を決定しました。

内容として①学生の要求・願いを知り、その実現を目指す行動をする。自治会による学び全体に対するアンケートを基に自己点検・評価委員と連携して、学び全体に対する学生代表の立場から自主的な学びを応援する運営を心掛ける。

②給付型奨学金が制定されたが、アンケート結果により、制度についての理解が不十分であったため学内だけでなく学外にも発信していく。今期はアルバイト実態調査アンケートを実施し現状を把握する。

③学生全員の積極的な活動、学年を越えての自主的、民主的な交流を行い、楽しい学生生活を送ることができるよう原動力となる自治会活動を行う。・三年生を送る会(3月)・新入

生歓迎会(4月)・東葛祭(12月)・国試激励会(1月)・学校懇談会 授業・実習について(3月)・体育祭(3月)④各クラスの役員および各サークルの代表との結びつきを深め、自治会活動の活性化を目指す。・学校懇談会(水) 授業、実習について話し合う。

主張

2年生

私は現在一人暮らしをしています。月に9万円の奨学金を借りています。その中から学費、光熱費、食費その他、様々な費用を払って行かなければなりません。

実習が続くとアルバイトができないため、収入がかなり減り生活が苦しいという状況になります。夜遅くまでアルバイトをしていて、睡眠が足りず疲労が残る授

業中に寝てしまうことで勉学に影響が出ている実態があります。

3年生

私たちは、この3年間看護師になりたいと言う目標のために一生懸命学んできました。新型コロナウィルスの感染が拡大しているので陽性者の国家試験の追試や濃厚接触者になってしまっても国家試験を受けられるような機会がいただけたら嬉しいです。



25期自治会一同

新任のご挨拶



瀧本 美陽

2022年4月から着任しました瀧本美陽と申します。私は2科16期生を卒業し、卒業後は代々木病院に勤めました。その後民間病院に転職をし、また民医連に戻るなどの経験をしました。学生時代は患者さんの基本的人権とは何か、寄り添う看護とはなにかということを考えることが出来ました。臨床では多くの看護実践をし、看護の実態を考えることが出来ました。そして、人権や看護についてまた改めて考えながら患者さんの看護や日本や世界の情勢と一緒に学びなおしたいと思い、着任しました。

着任当初は、不安がいっぱいでしたが、毎日エネルギーに溢れている学生から、学びを探究し続けることの大切さを学びました。そのような学生達と共に過ごすことで、私自身の成長にも繋がっています。

これからも学生と共に、患者さんの人権擁護を考えながら看護とは何かということを、探究していきたいと思います。これからもよろしくお願いします。



中川 千和子

中川千和子です。

2022年4月から着任しました。1科8期生の卒業生です。卒業後、東葛病院で勤務してきました。久しぶりに来た学校は、施設は変わらず懐かしくもあり学生の姿を見ながら自身の在学中を思い出している日々です。病棟勤務中は新人看護師や看護学生とともに看護チーム作りに取り組んできました。その中で大切にしてきたことは、患者の立場にたって看護ができること、それをやりがいとして看護師自身がいきいきと働けることを大事にもらえるように携わってきました。

昨年から教員として働く中で、学生の真摯に実習や学習に取り組み学び成長する姿や、実習で学生が受け持つことになった患者から、自身ももう一度看護とはなにかを考えさせられる機会となっています。まだまだ自身の至らないことが多く、心が折れそうになる時も、学生のところへ行き顔をみると、自分ももっともっと、頑張らなきゃ!と励まされることがたくさんあります。2023年4月~2024年1月は教員養成研修に行くことになりました。多くのことを身に付けて元気に戻ってきたいと思っています。学生と一緒に学び成長していけたらと思っています。よろしくお願いします。

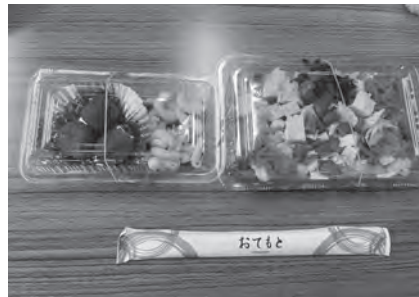
「コロナ前」に動き出した1年

東葛学食お弁当になって再開



2017 年秋から始まった
「ツキイチ東葛学食」

コロナ禍でお休みをはさみましたが、お弁当タイプに代わって再開しました。
2023 年 3 月で 41 回を迎えます。



3年ぶりの「体育祭」



優 勝：3 年
努力賞：2 年
応援頑張ったで賞：1 年
みんな頑張りました



「学生支援緊急給付金」「国家試験追試験」 を求める政府交渉

東葛看護専門学校事務長 児玉宏行

2022年11月30日民医連は13回目となる「学生支援緊急給付金」「国家試験追試験」を求める要請書を文科省・厚労省に提出、政府交渉と記者会見に臨みました。

ひっ迫する看護学生たち

2022年度全日本民医連看護学生アンケート調査からは、仕送りの金額が月額2万円未満しかないという学生が前回2回の調査よりも20%増加、奨学金の返済に不安があると答えた学生が半数から7割に増え、故にアルバイトをする学生は半数から8割へ急増していました。今回の取り組みでは、自分たちの考えや想いを国に届けたいと、学生が顔を出して動画撮影に臨み、初めて7つの看護学校の学生自治会（勤医会東葛看護専門学校、勤医協札幌看護専門学校、共立高等看護学院、近畿高等看護専門学校、泉州看護専門学校、ソワニ工看護専門学校、健和看護学院）から訴えを行いました。

学生支援緊急給付金を求め学生の声为国に直接届けました！

本校自治会2年生は「奨学金で、学費、光熱費、食費、実習に行く交通費も支払わなければいけません。お金の余裕がないため、アルバイトをしようと面接を受けました。感染対策のため、実習2週間前からシフトに入ることができないと伝えられ、落とされてしまいました。奨学金の中で生活することで精一杯です。クラスメイトは生活を支えるため、夜中のアルバイトをしていて、睡眠が足りず、疲労が残り、寝てしまうことで、勉学に影響がでているという実態があります。学生が安心して生活を送るためにも給付をお願いします」と訴えました。



厚労省記者クラブにて会見（2022年11月30日）

本校の山田かおる副校長は「昨年度120人中105人が緊急給付金を受けられることができたが、今年度は給付金がありません。学校独自の授業料分納・延納の措置を取りながら、何とか経済的理由での退学者を出してはならないと、政府に給付金の要請をしてきた。今医療現場は非常にひっ迫し、看護師も疲弊して離職している。一人でも多く現場に送り出したい」と強調しました。

国家試験追試験を求め看護学生たちの切実な訴え！

学生自治会3年生は「今まで何度も国家試験の追試実施の要望があったのに準備がされていない現状に全国の看護学生が疑問を持っている。今年こそ国家試験を受けられる機会を増やしてと、看護学生一同、心から願っている」と切実な訴えをしました。

参加した看護学校事務担当者は政府交渉で「国家試験に関しては3年も経っているにもかかわらず、今回も全く同じ回答で手が打たれていないことに強い憤りを感じている。追試の機会が保障されない中、学生たちは緊急事態宣言下と同様の感染対策を継続して頑張っている。第8波は昨年以上の感染爆発で市中感染は誰も免れない。災害級の事態と認識してあらゆる対応を検討していただきたい。国家試験会場への移動で6万人が動くと言われ、これ自体が感染拡大のリスクだと思う」と指摘しました。



文科省・厚労省との交渉

私たちに民医連はこれからも粘り強く学生と学校の切実な声を国に届け続けます。

学校評価懇話会（学校関係者評価）開催

2022 年 5 月 28 日 本校体育室にて

本校は、自己点検自己評価（以下 学校評価）として「学校評価懇話会」（学校関係者評価）を 2010 年度から 3 年に 1 回開催しています。新型コロナウイルス感染症拡大のなか延期になっていた 2021 年度の学校評価懇話会を 2022 年 5 月に 26 名で開催しました。日頃の教育活動を、学校関係者（学生、教職員、講師、実習病院関係者、保護者、同窓会、地域の方）と教育有識者（東京大学大学院教育学研究科教授勝野正 章さん他 2 名）で共有し、それぞれの立場で今後 3 年間どのような方向で教育実践していくかを確認していく場と位置付け「開かれた学校づくり」として取り組んで来ました。

学生自治会は、コロナ禍での経済的困難を厚労省と文科省へ動画を通して伝え、学生支援緊急給付金が 2 年間支給された取り組みについて報告しました。

参加された委員の皆様からは、看護学生が自らの困難を自分たちの声として届けた取り組みへの共感と、自治を育てる学校教育の意義が語られました。保護者代表者は、東葛看護学校学生自治会として活動をする中で仲間に育てられたこと、看護師を目指し成長していく子を誇らしく思っていると話されました。

教育活動を支援いただいている多くの方々への感謝とともに、日常の取り組みに確信をもち多くの方との共同によってさらに教育を発展させたいと決意する時間でした。

日本看護学校協議会 学校長会 実践報告

2022 年 6 月 3 日アルカディア市ヶ谷にて

「“学生とともに” 行う学校づくり」として、2006 年から始まった学校評価の 15 年間の道のりについて報告しました。

年 1 回行う学校評価アンケートは学生自治会が集計し、これをベースに学生と学校側で年 2 回懇談を重ねています。

学生自治会の要望から制定された「流山市看護師修学資金」（給付型奨学金制度）の経緯をその当時の自治会長 2 名も報告しました。行政・地域の立場からお二人の方からも発言いただきました。校長窪倉みさ江先生は本校が大切にしてきた教育実践を教育理念から報告しました。

「学生らの声を聴き、権利が尊重されている学校だからこそ、学生もつらい状況にある仲間・他者の声を聴き権利を尊重するための行動をとれたのではないだろうか。教育の場はこのように、人権尊重の場でなければならない」と本校の学校評価委員の方よりコメントをいただきました。



校長と元自治会長のお二人

2022 年度雑誌掲載報告



メヂカルフレンド社

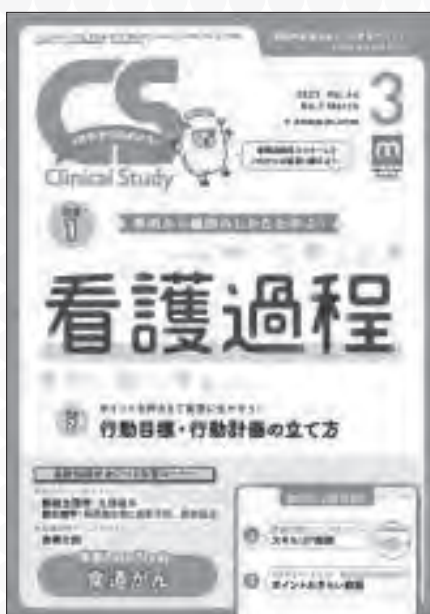
「看護展望 8 月号」(47 巻 10 号)

新しい臨地実習のかたち⑦

『地域にクラス人々に学ぶ「地域・在宅看護論」』

副校長山田かおる先生が執筆されました。

開校から 28 年間取り組んできた事を、地域包括ケアにおける地域連携教育として発表しました。「1 年生地域交流研修」と「2 年生地域フィールド」の取り組みは、「地域住民の命と健康を守る医療者の役割を学ぶ」ことも目的として毎年取り組んでいます。



メヂカルフレンド社

「Clinical Study 3 月号」44 巻 3 号

『先輩に聴いてみた 実習 STORY FILE』

3 年生 4 名が後輩の皆さんへ実習を通して大切にしたこと、感じた事をページいっぱいに掲載されています。「患者さんの願いを一緒に考えていける看護師になりたい!」と 4 名の言葉で語っています。

＊厚生労働省「令和 4 年度看護職員確保対策特別事業（教育ライン）看護基礎教育における地域住民と連携した教育事例収集事業」に好事例として本校が選出され 2023 年春に発行の冊子に載る予定です。

＊その他 全日本民医連、東京民医連の各会報に本校を取り上げていただきました。

ようこそ先輩

東葛看護専門学校卒業後は、障害者病棟や循環器内科病棟で働き、現在は地域包括支援病棟で働かせていただいています。

急性期病棟では、治療中心の看護を学び、『患者様の願いは何なのか?』『患者様の生活背景はどのようなものなのか?』『家族の願いはどのようなものなのか?』を知り、東葛看護専門学校で学習した『健康で文化的な最低限の生活を営む権利を有する。』を共に考え退院支援を行っています。

高齢者が増加していく中で、本人が家に帰りたいと希望されても、老々介護や生活困窮から自宅退院が厳しい状況があります。

covid-19の流行により、感染予防として面会できない病院では、長い間会わないうちに、日常生活動作の低下や認知症の進行から、患者さんの変化を受け入れられない事例が多くあります。携帯電話や病院のskyphoneを利用し、ご本人と家族が画面越しではありますが面会できるよう実践しています。患者様の一番そばにいる看護師として、自宅や入所施設への退院支援が重要な役割となっています。

看護実習が困難な状況ではありますが、学生時代の学びは、臨床の現場に立った時に役立つことと思います。

看護師は、患者様の健康の回復や生きる力を感
じることのできる、自身の成長にも繋がる仕事で
す。皆様と一緒に
働ける日を楽しみに
待っております。健
康に十分気を付け、
多くの学びをしてく
ださい。

(17期生 2科
斉藤さつき)



私は東葛看護専門学校の17期卒業生で、現在は東葛病院で総合内科病棟の看護師として働いています。

看護師になろうと思ったきっかけとしてよく聞
くのが家族に医療従事者がいるというものですが、父
が医師で母が看護師という私もそんな医療者二世的
な存在でしょうか。高校生の頃、進路に迷っていた
私に看護師を目指すことを促してくれたのは、当時
看護学校の教員をしていた母でした。

小さい頃から看護学校に出入りしていて馴染み
があったのと、看護学生さんが優しく好きだったの
で進学を決めたことが私の看護師を目指したきっ
かけでした。

看護師を目指した頃は看護師がどんな仕事かも
よく知らなかったので、学生時代の実習の大変さや入
職してからの激務の毎日に覚悟の足りなさを実感し
ました。ただ、それでも看護師続けて9年経とうと
してしますので、大変な部分も含めてやりがいの大き
い仕事だと感じられるようになりました。

現在結婚していて子供も二人いるのですが、男性
でも育児休暇を取りやすかったり、シフト制なので
子供の行事に合わせて休暇を取りやすかったりする
のも良いところだと感じ
ています。

コロナ禍において以前
とは違った負担が強いら
れるようになってはいま
すが、仕事も家庭も大事
にしながらこれからも看
護師続けていきたいと思
います。

(1科 17期生
井上貴文)



編集後記

コロナ禍から3年目になった教育活動ですが、今年
は感染対策をしながら本来の授業に戻しました。1年
生は対面での入学式、在校生や保護者に見守られ新た
な一歩を踏み出しました。ナーシングセレモニーでは
「RADWIMP」の合唱と患者さんの人生観を尊重し、願
いや要求を応援できる看護師を決意しました。生命活動
は今年1年生のカリキュラムで実施しました。どのグル
ープも地球誕生から人間の誕生、成長発達まで長い歴史
をかけて自分たちがいると人間の生命活動の巧妙さを
学びました。延期となっていた基礎実習も3月には実践
できそうです。2年生は老年・在宅実習を通して住み慣
れた地域で生活する患者さんの願いを応援する看護を展
開しました。いくつになっても人間の回復力の凄さに生

命活動を実感しています。先日終えた地域フィールドは
労働が人間に与えた影響を考え、労働と生活の視点から
人間を捉える学びになりそうです。

3年生は3年ぶりに研修旅行(沖縄、伊江島)を実現
しました。戦争の実相や加害の歴史、広がる米軍基地建
設を目の当たりにして命を守る医療者の役割を考えまし
た。学びは「平和の武器」だと全員が心に誓い、平和を
守り続ける決意しました。総合実習ではそれぞれが基本
的人権の立場に立ち、人権擁護の主体者になる看護師を
目指す集大成のゼミになりました。ここ数年、どう学生
の学びを保障できるのか教員集団で悩みましたが、いつ
も教育理念に立ち戻った教育が学生の成長につながった
と実感しています。
(教員 高田澄子)

キラリ 学ぶ青春



生命活動 田植え



28期生入学式



基礎看護学 洗髪演習 患者さんに心地よい技術を追求します



2022年3月
～2023年4月
小林 功
モノクロ写真館



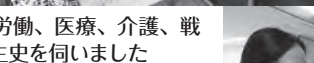
ナースングセレモニー



ナースングセレモニー



リモートでオープンキャンパス 学生主体で“学びの発表”を行いました



地域の方々から労働、医療、介護、戦争体験などの人生史を伺いました



地域フィールド 横田基地

交流研修



勤医会東葛看護専門学校

編集・発行 勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪 409 TEL.04-7158-9955 FAX.04-7159-7055

発行責任者 校長 窪倉 みさ江